孤独死しても早期に発見されるために

孤独死という言葉にドキリとするおひとり様も少なくないのではないか。人知れず、ひっそりと死んでゆく……想像するだけで物悲しいが、孤独死の現場を数多く見てきた遺品整理業「キーパーズ」の吉田太一社長は、「ひとりで死ぬことよりも、死後数日経っても発見されないことが問題だ」と話す。「孤独死のすべてが〝寂しい死〟だったわけではない。何日経っても誰にも

気付いてもらえない、『どうしたんだろう』と気にかけてもらえない、そういう生活スタイルが寂しいんです」

吉田さんが手がける遺品整理業とは、遺族に代わって故人の部屋を片付け、家財道具を処分、形見分けの品を配送するサービスである。部屋の清掃や遺品の供養は言うに及ばず、車両の廃車手続きなども一手に引き受ける。同社の依頼の九割が単身世帯の遺品整理で、ひとり暮らしの高齢者が自分の部屋の整理を事前に予約する例も増えているという。

死臭が漂うまで誰にも気付いてもらえず、遺体や部屋の中がたいへんな状態になっているケースも、年に四〇〇件近く引き受けている。「こんな状況になると、大家さんをはじめ、いろんな人に迷惑がかかるし、恥だけが残ってしまう。それを防ぐには現実を知ってもらうことが重要だと考え、『独居老人の孤独死』という啓発用DVDをつくりました。ショッキングな場面もありますが、『絶対にああはなりたくない』と思ってもらえたら幸いです」と吉田さんは話す。

また、吉田さんが問題視しているのは、五十代後半の男性に悲惨な孤独死が増えていることである。「高齢者の場合、周囲も気にかけているし、ご本人も友人と鍵を持ち合うなどの対策も講じている。でも、五十代の独居男性はひきこもっていることが多いので、発見が遅れるんですよ」

万一のときすぐに見つけてもらうためには、普段から家族や友人、近所の人とのコミュニケーションを欠かさないこと。週に何回か宅配の弁当を頼み、定期的に誰かが訪ねて来る状況をつくっておく方法もある。

「電化製品が壊れたら修理する、部屋が汚れたら掃除をする、冷蔵庫の中を整理する」といった日々の心がけも大切だと、吉田さんは説く。「バランスが壊れたままで過ごしていると、それが当たり前になってくる。次第に気力を奪われ、人づきあいも面倒になるんですよ」。実際に、深刻な孤独死の現場には、ゴミが散乱し、壊れた家電製品が転がっていることが多いという。賞味期限切れの食品が異臭を放つ冷蔵庫は、死臭漂う孤独死の部屋の縮図ともとれる。

「人様に迷惑をかけたくない」とひきこもった結果、孤独死して周囲に迷惑をかけてしまっては本末転倒である。納得できる人生のエンディングを迎えるためには、須齋さんが言うように「やはり生きることが大事」だということ。死にざまは、その人の生き方そのものを表すといえるのではないだろうか。